

Title	京大上海センターニュースレター 第27号
Author(s)	
Citation	京大上海センターニュースレター (2004), 27
Issue Date	2004-10-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/26343">http://hdl.handle.net/2433/26343</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

---

---

# 京大上海センターニュースレター

第 27 号 2004 年 10 月 21 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

---

## 目次

○ 11/13・14 自動車シンポジウムのご案内

○ 自己紹介 ―ユーラシアへの門口に立つ―

+++++

以前からお知らせの京都大学上海センター主催のシンポジウムです。しばらくお知らせをさせていただきます。

11 月 13 日・14 日上海センター主催講演会・研究会

## 中国の自動車産業―その過去・現在・将来を探る―のご案内

### 講演会

日 時●11 月 13 日(土)午後 2 時～6 時

場 所●京都大学法経総合研究棟大会議室

挨拶●金田章裕 京都大学副学長・理事

司 会●本山美彦 京都大学大学院経済学研究科教授

講演1●丸川知雄 東京大学社会科学研究所助教授 中国式自動車製造法:日本との対比

講演2●嶋原信治 元トヨタ自動車中国事務所首席総代表 トヨタ自動車の進出過程

講演3●塩地 洋 京都大学大学院経済学研究科教授 中国における自動車流通

●懇親会

### 研究会

日 時○11 月 14 日(日)午前 9 時 30 分～午後 5 時

場 所○京都大学法経総合研究棟大会議室

報告1○高山勇一 現代文化研究所中国研究室室長 自動車産業政策

報告2○孫 飛舟 大阪商業大学総合経営学部助教授 3S・4S 店と自動車交易市场について

報告3○山口安彦 元本田技研工業中国業務室主幹 中国自動車企業の自主開発能力

報告4○大原盛樹 アジア経済研究所研究員 オートバイ産業の競争環境

報告5○上山邦雄 城西大学経済学部教授 日系メーカーの対中国戦略

---

## 自己紹介 ユーラシアへの門口に立つ

中国社会科学院研究生院外国專家 井出晃憲

京大経済学部95年卒業の井出と申します。このたび縁あって中国社会科学院に勤務することになり、8月より北京に居住しております。今後、仕事や生活のうえで中国と深く関わることになりますので、上海センターの協力会会員にさせていただいた次第です。

私はそもそも少年時代から、中国も含め広く内陸ユーラシアの歴史や文化に強い興味を覚えてきました。それは、東西冷戦下にあって「カーテンの向こう側、とくに情報の希薄な内陸ユーラシアはどうなっているのか」、そして「そこに生きる“海をしらない民”は、どのような暮らしをし、何を思っているのか」という素朴な疑問からでした。大学入学後は探検部に所属して、念願であった中国から旧ソ連にかけてのユーラシア大陸各地への放浪の旅に長期に渡って数度出かけました。したがって、学業の面では必ずしも勤勉な学生ではありませんでした。京大探検部卒業と言ったほうがいいかもしれません。ちょうどその頃は、ソ連の崩壊や東欧の民主化、一方において中国では民主化運動が天安門事件で潰えるなど、20世紀の壮大な実験ともいえる「社会主義」が問い直された激動の時期でした。そうした混沌と再生の現場を自分で歩きこの目で見たことは、今から思えば貴重な体験であったと感じます。さらに、現地において、私と同年代で新たな国づくりに燃える若者たちと生涯の友人の契りを交わせたことも大きな収穫でした。

卒業後これまで10年ほどのあいだ、「国家・民族・宗教を超えて、理解・親睦・協力を」というスローガンを掲げる、あるNGO団体に所属して、ユーラシア各地の少数民族を対象に援助や交流などの実践的な活動に携わってきました。余談ながら、そうした活動のなかで中国籍のモンゴル族である現在の妻と知り合うことにもなり、昨年11月には長男も誕生しました。この子には、世界の将来を担うコスモポリタンになってほしいと思っています。北京の天安門に掲げられた「世界人民大団結万歳」という標語。今世紀に入って以降の度重なる戦乱を見るにつけ、時代錯誤の政治的プロパガンダとしてではなく人類の高邁な理想を謳ったものと解すれば、今なお色褪せていない標語だと思うのですが・・・。

今の仕事は、社会科学院が運営する大学院大学において、学生たちに日本語と日本地域研究を教授することです。中国教育部発表による中国国内の大学院のランク付けによると、当大学院は経済学・哲学・歴史学の分野で第一位、法学・文学の分野で第二位とされており、全国から優秀な学生が集まっています。毎回の授業では緊張感もありますが、充実した日々を過ごしております。私自身も学生たちから学ぶことが多く、教育というよりはむしろ国際交流に携わっているのだという感を強く持ちます。学生たちは卒業後、研究者としてあるいは実務家として、対日関係で重要な役職に就くでしょうから、私の仕事もささやかながら日中友好の促進の一助となれればと希望しております。

私自身も今後、教育者としての仕事を続ける一方で、自分自身も研究を続けたいと思っております。ユーラシア内陸部をフィールドとして、社会経済史的観点から民族学を捉えてみたいと考えています。

北京は、中国だけでなく広くユーラシア大陸全域への門口です。これから当地にしっかり足場を築いて、地に足のついた地道なことから着実に、研究・実践・交流の諸活動に邁進したい所存です。機会をいただければ、今後も皆様方に北京からお便りを差し上げたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。